

栗山町の自然

人々が動きだした・雑木林が蘇った

伊達佐重

だて すけしげ
1932年三笠市生まれ
学芸大学札幌分校修了
三笠市立教育研究所員
空知教育研修センター講師

本文のねらい・要点

栗山町民が、雑木林で発見されたオオムラサキの保護から始めた自然とのかかわりの道すじをたどり、今後の「ふるさと栗山づくり」の方向を考えたい。

一、オオムラサキの会

栗山町小・中学校の理科担当者たちが「全国一律の教科書では本物の自然は伝えられない。」というので、生きた地域教材をさがして歩いてきた時のことである。町の北側のお大師山（標高一四・八㍎）で国蝶オオムラサキを発見したので一さわぎになった。

公開すればマニアに荒されるという心配はあったが、「公開して守る」という方法を取ることにした。そのために発見一年後の一九八六年には「オオムラサキの会」が結成されたのである。

二、理科サークルの活動

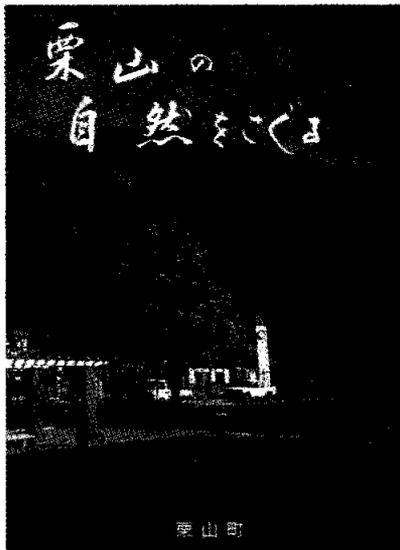
理科の授業に地域の教材を集めようとして初めて会合を開いたのは一九八〇年だったと思う。放課後と土曜・日曜の時間を使って、とに角取材に歩きまわった記憶が未だ強く残っている。

編集会議はいつもビリビリとした言葉が行きかう場になった。足で歩いて自分の目で見て書いた文章や、自分の耳で古老などから聞いた内容などといと批判されるからである。そんなこともあって部活動等で取材の時間が取れない中学校のサークル員の出席が思わしくない時期もあった。「栗山に住む人にしか記録できないことを持ちよる」という方針はきつかったが、結果として良い資料を

発掘するために実によく動いてくれたのである。「栗山の自然をさぐる」という表題でまとめられた集録は、南空知から全道・全国へと発表の場を持つことができた。

また、教育委員会の協力で同名の本が改訂を三回重ねて出版された。更には、その内容をわかりやすくして「広報くりやま」に五年間にわたって百二十回も連載したのである。サークル員が自ら撮った写真も添えて解説したものである。

町はその連載記事をもとに全項目にカラー写真を付けて新訂版の「栗山の自然をさぐる」を刊行し、町内の小・中学校、高校に配布し、理科の補助教材と活用してもらっている。



「栗山の自然をさぐる」の表紙

三、町民の活動

(1) エゾエノキの里親制度

オオムラサキの会として進めて来た活動の一つに、エゾエノキの里親制度がある。これは、実生のエゾエノキから育てた幼木を、三〜五年間自宅の庭で育ててもらい、大きくなったそれを山に移

植するとうり取り組みである。

「二〇年後の夢を叶えてください。」との呼びかけには訳がある。その一つはオオムラサキは幼虫の食樹のエゾエノキだけあればよいのではなく、成虫が吸う樹液の出るミズナラ、ハルニレ及びヤナギ類、そして花に蜜を有するシナノキ等で構成される豊かな雑木林を必要とする。

もう一つは、オオムラサキの世代交代を可能とするエゾエノキが少なくとも二〇〜三〇年の樹齢を持つものでなければならぬという条件がある。

呼びかけに応じてくれた町民は延べ一七〇名になった。この種子は札幌市の藻岩山で集めたものであり、約五百本が町民の庭で大切に育てられて大きくなった。その幼木は、ファールルの森の一區画に里親の名札を付けられて植樹され、順調に伸びている。この木の周辺には、雑木林を復元するためにミズナラやオニグルミやエゾヤマザクラの苗木も毎年植え続けている。

(2) ふれあいトーク
この集まりは、環境庁の支援で造られた「いきもの里ふれあいプラザ」を会場にして、三ヶ月に一度ぐらいつ開かれている。他の町村で行なわれているこの種類の集まりと異なる点は、「町民みんなが講師」の建て前をかたく守って一九九一年から続いている。

町内のそれぞれの分野で活躍している人が話題を提供し、いわゆる肩のこらない話に毎回数十人の人が参加している。演題と関連させて、例えば「葉草の話」にハーブ・ティを、「玉子の話」に玉子のスープとゆで玉子といった軽食を提供して好評を得ている。昨年十二月までに四十二回の集まりを持った。町民の「心に木を植えていく」活動

として位置づけているというユニークさがある。

参考までに最寄りの四年間の演題を紹介する。
一九九六年

新春に百人一首を楽しむ……………(三四名)

野外体験のすすめ……………(三二名)

栗山の川にすむ生きものたち……………(四一名)

宮沢賢治「よだかの星」を読む……………(六四名)

一九九七年

縄文への誘い……………(三五名)

ホタルはなぜ光る……………(三〇名)

人と魚にやさしい川づくり……………(三一名)

一九九八年

栗山の民話「泣く木」伝説……………(四八名)

リアルアートへの誘い……………(四二名)

松浦武四郎と夕張日誌……………(六〇名)

水環境とライフスタイル……………(三五名)

一九九九年

とんでもない栗山の宝物「鋏形」……………(四九名)

鳥についてのとりとめもない話……………(四〇名)

酒米を育てるゝ道産米で作る……………(三四名)

(3) 子ども達とのかかわり

ア 昆虫調査隊

一九九二年、ファールルの森の一角に蝶の観察飼育舎が完成された。国蝶オオムラサキをはじめ数種の蝶の成長ぶりが真近に見られる施設である。オープンに伴って虫好きな子ども達が続々と集まって来た。足しげく通ってくる顔ぶれは常連が多かったから、何となくサークルができて「昆虫調査隊」と名付けられた。今年は結成八周年にあたる。

構成は小学生と中学生の男女三十余名からなり小学生が大半である。一昨年から中学生OBの十名は「指導班」と呼ばれ、後輩達の指導にあたり自主的な行事計画を樹てて自らも行事に参加している。彼らは、かって得た知識たとえば、何の虫がどんな草や樹の葉を好んで集まるのかといったことを、下級生に受け継ぐ役目を果たしているのである。異年齢間の交流が自然に行なわれ、仲間

耳よいな話と楽しい語らいの夕べ 第42回ふれあいトーク

- 日 時 12月8日(水) 午後7時~9時
- 場 所 いきもの里「ふれあいプラザ」(桜丘1)
- 題 「酒米を育てる~道産米でつくる」
- 講 師 大西勝博さん(大井分)
小林精志さん(錦3)

● 内 容

大西さんは大井分で「きらら397」・「ほしのゆめ」をはじめとして古代米や酒米などのこめづくりに挑戦しています。今年は北海道初の酒造り好適米「北海278」を生産しました。それぞれ生長が違うようで、ずいぶん育て方に苦労したそうです。

私たちが食べる米と酒を造る米は違います。酒米では山田錦や美山錦など有名ですが、昨年より北海道に適した銘柄として、北海278号と空雫158号が生産されています。

この道産の酒米をつかったうまい酒づくりに夢をかけているのが、小林酒造株式会社的小林さんです。今回のふれあいトークではこのお二人に米づくりや酒づくりにかける苦労と夢を話していただきます。

お車でお越しはご遠慮ください。お気軽にご参加ください。

● ホットコーナー

古代米をブレンドした赤飯、新酒の試飲

● 参加費 300円

● 主 催 栗山オオムラサキの会

意識がはぐくまれていくという実績が評価されて少年少女サークル活動のモデル事業に指定された。主な活動を紹介すると、春は「いきものの里ふれあいプラザ」に飼育展示の町内に生息する水生生物の水槽清掃から始まる。

五月は新入隊員の歓迎会と、年間活動計画を決める総会が開かれる。六月はみんなで網などを持って小川に入り水生生物の採集をする。水生昆虫や魚や貝などは、ふだんは目にするのではない生き物なので歓声がやまない行事である。

七月は、お大師山を中心にした昆虫調査会を行なう。新入会員はそれなりに活躍できる場面などで、生き生きとした行動が見られる。

八月、道東の丸瀬布町への一泊二日の研修旅行である。山奥での宿泊体験の日程の中に自炊活動も組まれているので、異年齢間の交流が食事の準備などを通じて一層深まっていく。

秋には鳴く虫を中心にした草原性昆虫の調査会や、昆虫標本製作会など、冬期間は自然の草木を使ったクラフト講座を開いたり、野鳥観察会へ積極的に参加をしている。

隊員は観察飼育舎を訪れる方々への説明役もやり、参加者から好評を得ている。

環境体験学習



水をヨシやイネなどの植物によって水質浄化をしようという実験に地域の継立小学校が協力をしている。総合学習の一つとして計画がたてられ、稲作を体験しながら汚濁された水を植物が浄化する作用を実感するものである。

田植から一ヶ月後、水のにごり具合を見る透明度の実験や、簡単に水質を測るバックテストもやってみた。水田の中で泥まみれになっての雑草ぬきで、水生植物のたくましい生命力におどろいた子どもも多かったようである。

この学習に参加したのは四年〜六年までであるが、植物グループと昆虫と魚グループに分け、事前学習で質問事項をまとめたプリントが用意されるという周到さである。だから、鋭い質問もあって説明をしたオオムラサキの会員達がタジタジとさせられる場面が多かった。

十一月に収穫した米に感謝をし、学校で試食会が行なわれた。自然の力を活用した水質改善の取り組みに子ども達が参加していることは、きわめて大きい意義を持つと思う。

最後に、水質が良くなるにしたがって昆虫（特にトンボ）が増え、水生植物の種類にも変化が現われていることをつけ加えておきたい。

四. 行政との連携

オオムラサキの会を入れお大師山を柱とした自然愛好団体が六つある。歴史的遺産の保存を主とするお大師山を愛する会、草樹と親しむ植物観察会、野鳥観察のおっ鳥クラブ、ヘイケボタルと水系調査のホタルの会、栗の森づくりを進める青年会議所とオオムラサキの会である。

四年前、この六団体と前述の昆虫調査隊もオプ

ザーバーに加え「いきものの里づくり協議会」を発足させた。構成員が二百人をこえる大世帯となり、共同事業として春の合同観察会、夏のいきもの里全道サミット参加、秋の栗ひろい遠足、冬山の雪上観察会などを開いている。

行政は、こうした町民側の「自然保護」に対する意識の高まりにこたえ、八年前に昆虫の専門員を採用し、あわせて栗山公園に続くお大師山の雑木林一帯の土地七畝を購入した。町が「ふるさと自然財産」とした土地に雑木林を蘇らせるための春の植樹、秋の冬囲い作業には、多くの町民が自主的に参加して汗を流している。

昨年末、この自然財産をぼう大に増やすことが町議会で可決された。前回の三倍以上の二一・八畝の山林と田畑を購入したのである。これらの土地の保全と活用には、町民と知恵を出しあいながら、人と自然が共生する町づくりをすすめたいものである。

